

□ オーケストラ

寺西基之

国内のオーケストラはどことも年間プログラムの組み立て方を工夫している。聴衆を確保するために比較的ポピュラーな作品も取り入れつつ、一方で意欲的なプログラムを取り混ぜて独自性を出していく、というのが全般的な傾向だが、大作作曲家のアニバーサリー・イヤーにあたる年にはその作曲家に焦点を当てたものが多くなるのは自然なことだろう。その点で2018年は生誕100年となるバーンスタインの作品を取り上げるオケが非常に目立った年となった。例えば、NHK交響楽団は首席指揮者P・ヤルヴィが「ウェストサイド・ストーリー」全曲を演奏会形式で上演、神奈川フィルは常任指揮者の川瀬賢太郎の指揮で、名古屋フィルもやはり川瀬の指揮で、広島交響楽団は前音楽監督の秋山和慶の指揮でそれぞれ交響曲をメインに置いたオール・バーンスタイン・プロを定期の中で組み、東京ニューシティ管弦楽団は三ツ橋敬子の指揮でシアターミュージックとミュージカルのナンバーを定期で特集するなど、日本のほとんどのオケが様々な形でバーンスタインの管弦楽作品やミュージカル作品などをプログラムに入れていた。アニバーサリー・イヤーだからといってこれほどまでにひとりの作曲家に光が当てられるのは珍しいことで、また通常はどちらかという大指揮者として認識されているバーンスタインの作曲家としての面がクローズアップされたという点でも、2018年は特別な年となったといえる。

一方でアニバーサリー・イヤーを迎えた大作作曲家としては死後100年のドビュッシーもいたが、せっかくの機会だったにもかかわらず、日本のオケでドビュッシーに焦点を当てるような取り上げ方をしたところが意外なほど少なかったのは、残念であった。その中で一際光っていたのがミンコフスキ指揮オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）のドビュッシーのオペラ「ペレアスとメリザンド」。これはボルドー国立歌劇場のプロダクションに基づく公演で、石川県立音楽堂のステージ中央にオケが陣取り、ステージ手前の紗幕と背後に様々な映像を投射することで幻想的な舞台を夢幻自在に作り出すとともに、衣裳を付けたフランス系の歌手たちがオケを囲む空間で演技を行うことで、オケ主催の公演としては稀にみるオペラ上演となった（東京オペラシティでの公演も行われたが、そこでは紗幕が使えず、そうした舞台効果を挙げられなかった）。

このミンコフスキの「ペレアス」は彼がOEKの芸術監督就任の演奏会として開催されたものだったが、他にも2018年度にシェフが交替した楽団はいくつかある。札幌交響楽団は新たにパーメルトを首席指揮者に迎えてこれまでのオーソドックス路線を継承、Rシュトラウス「アルプス交響曲」による就任記念演奏会はテレビでも取り上げられた。仙台フィルは飯守泰次郎が常任指揮者に就任、これまでのヴェロの路線とは違うドイツものを軸とした新たな道を歩み始めている。大阪フィルは尾高忠明が音楽監督となり、定期のほかにベートーヴェンの交響曲をツイクルスで取り上げるなど、早くも尾高色を打ち出している。

オケのレパートリーの保守化が指摘される昨今だが、それでも2018年の各楽団の定期演奏会をみると結構意欲的な企画は多かった。日本フィルは桂冠指揮者ラザレフの指揮でストラヴィン

スキーの知られざる傑作「ベルセフォース」を日本初演し、大きな話題となった。カンブルランと読売日本交響楽団も相変わらず好調で、ペンデレツキ、シマノフスキ、ハース、ラヴェルという近現代の作品を取り混ぜた11月定期などはまさにこのコンビの面目躍如たる公演。東京交響楽団は音楽監督ノットとエルガーの「ゲロンティアスの夢」やヴァレーズの「アメリカ」などで名演を披露、また飯森範親の指揮ではウド・ツィンマーマン「白いバラ」を日本初演している。東京都交響楽団も音楽監督大野和土の指揮によるマントヴァーニやシュレーカー、下野竜也の指揮でのコリアーノ「ミスター・タンプリマン」など、刺激的な選曲が光った。新日本フィルがシュテンツの指揮でヘンツェの交響曲第7番を演奏したのも注目される。

一方東京フィルは名誉音楽監督ジョン・ミュンファンがベートーヴェンの「フィデリオ」、首席指揮者パッティストーニがボヴェイトの「メフィストフェレ」をそれぞれ演奏会形式で上演、圧倒的な成果を収めた。定期演奏会での演奏会形式のオペラとしては東京シティフィルも常任指揮者高関健の指揮でラヴェルの「スペインの時」を、九州交響楽団はパッティストーニの指揮でマスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」を取り上げ、それぞれ高い評価を得ている。

大作では、名古屋フィルと九州交響楽団の両楽団の音楽監督を兼任する小泉和裕がそれぞれのオケでマーラーの交響曲第8番を振り、新日本フィルの音楽監督上岡敏之はブルックナーの交響曲第9番を「テ・デウム」をフィナーレに置く形で演奏した。ブルックナーでは飯守泰次郎が関西フィルで交響曲第8番を、東京シティフィルでミサ曲第3番を取り上げ、両楽団との深い絆を示している。京都市交響楽団の常任客演指揮者高関健によるプリテンの「戦争レクイエム」、山形交響楽団の首席客演指揮者鈴木秀美のハイドンの「天地創造」もともに圧倒的な名演。「天地創造」は兵庫芸術文化センター管弦楽団も芸術監督佐渡裕の指揮で取り上げている。音楽監督大友直人と群馬交響楽団のコンビによるエルガーの「神の国」も注目された公演。長年にわたって大阪交響楽団の看板となってきた常任指揮者寺岡清高との「ウィーン世紀末」シリーズは、2018年度が最後となりフランツ・シュミットの交響曲第2番などが演奏された。

定期以外では、首席指揮者飯森範親のもとでハイドン交響曲全曲演奏をめざす日本センチュリー交響楽団の“ハイドン・マラソン”が順調に進行している。芸術総監督下野竜也による広響の“ディスカバリー・シリーズ”もシューベルト、スッペ、新ウィーン楽派を組み合わせたウィーン音楽プロが興味深かった。

以上ほんの一端に触れたにすぎないが、財政的な厳しさの中で各楽団がこうした意欲的な姿勢を打ち出していたことはおおいに評価されよう。

外来オケも相変わらず多かったが、中でもベルリン・フィルを離れたラトルが現在の手兵ロンドン響とのコンビで来日してフレッシュな演奏を聴かせたこと、春にイスラエル・フィルとの来日を重病でキャンセルしたメータが秋にバイエルン放送響とともに病気のヤンソンスの代役として急遽来日して円熟の境地を示したことは大きな収穫だった。ウェルザー＝メストは6月にクリーヴランド管と、11月にはウィーン・フィルと来日、特に前者とのベートーヴェン・ツイクルスは高い評価を得ている。ティーレマンとシュターツカペレ・ドレスデンのシューマン・ツイクルス、ミンコフスキとレ・ミュージシャン・デュールブル、P・ヤルヴィとドイツカンマーフィルなども評判になった。何よりも衝撃的だったのがロトとレ・シエクルのコンビで、初演当時の楽器による精緻で表出力に溢れたラヴェルやストラヴィンスキーの名演で聴衆を魅了した。